
闇の神IF

門矢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の神IF

【Nコード】

N7459X

【作者名】

門矢光

【あらすじ】

此は闇の神のIFの話。朔夜がクロスワールドに行かないで旅をしていればと言う話。なので色々な設定が違います。

n o n a m e ～名も無き世界～（前書き）

第一話

noname 名も無き世界

朔夜「次は何処の世界かな？」

俺はデイクイドみたいな感じで旅をしていた。目の前のロールが変わり、普通の町並みになった。

朔夜「noname、名もなき世界か……俺たちの世界か……」

烏「ゆつくりしようぜ久しぶりさ！あのテンパから解放されたんだしょー！」

朔夜「はーそうだな……そうしようか」

俺は少し胸を高鳴らせて外に出た。あいつは元気かな？するて

？「やめてください！」

チャラ男1「いいじゃん？君一人なんだろう？」

チャラ男2「なら俺たちと遊ぼうぜ」

碧髪のツインテールの1ら才の少女つつかぶっちゃけアインハルトだね。俺の幼なじみアインハルト・ストラトスがチャラ男たちに絡まれていた。このアインハルトは可能性のひとつ魔法もないアインハルトだ。ゆえになのはたちを知らない。つつかこの世界になのはは居ない。アニメは放送されてるし漫画でvivioもやってるしね。まずはアインハルトを助けられないとな

朔夜「お前ら、何やってるんだ？嫌がつてるんだから止めるよ！」

そう言うのと三人は振り向き、アインハルトは俺を見て驚いていた。
まあ1ヶ月以上音信不通だったからな。

アインハルト「朔夜さん？」

チャラ男1「何だお前？」

朔夜「そいつの親友だよ」

俺はそう言っアインハルトをつかんでいたチャラ男1の腕を思い
つきり捻り上げた。

チャラ男1「ぎゃあああああ！」

チャラ男1は軽い悲鳴をあげた。チャラ男2はナイフを取り出して
俺に襲いかかる。

朔夜「光ものかよ……………」

俺はチャラ男1を離して蹴り飛ばしチャラ男2のナイフを持った手
に肘を思いつきり叩きつけてアインハルトの手を握りしめ走り出
した。

アインハルト（久しぶり朔夜さんの手……………ドキドキします。嫌今
は違います。聞かなければなりません）

朔夜「此处まで来ればいいか。」

俺は移動拠点にしていた中華料理屋につく。するとアインハルトは口を開きだした。

アインハルト「今まで何処に行っていたのですか？1ヶ月以上も？」

アインハルトが黒い笑みを浮かべながらそう言ってきた。俺は冷や汗をかきながら

朔夜「まあ……………人には話せないことがあるんだよアインハルト」

アインハルト「前もそんなことを言っていましたよね？あの時は今度話すと言っていました。今日は話してもらいます」

朔夜「覚えていたのかよ……………」

アインハルト「はい。朔夜さんのことですから」

俺はため息を吐きながらそう言つとアインハルトは少し赤くなりながらそう言つた。

朔夜「俺は……………」

俺が話を切り出すと

ドゴーン

きやああああああ

爆発音と悲鳴が聞こえた。俺は急いで外に出ると

朔夜「グロンギにアンノウンだと……………」

俺は自分の目を疑った。何故この世界に！居ないはずだろ！まさか……………

朔夜「テメーのせいか、真人才オオオオオオオ！」

俺は全力で叫んだ。するとアインハルトが出てきて

アインハルト「何があつたのですか……………何ですか？この状況……………嘘ですよ？此は夢ですよ？朔夜？嘘ですよ！」

アインハルトが俺に問いかけてきた。俺は無言でしたを向く。するとアインハルトは走り出した。

朔夜「何処に行く気だ！」

アインハルト「お母さんを探しに行きます」

朔夜「今は危ない、さが……………アインハルト「嫌です」アインハルト！」

アインハルトは俺の言葉を聞き入れず走り出した。くそ！俺は全力で走り出した

アインハルトサイド

私は走りました。全力で走りました。途中でいろんな怪物を見ました。あれは朔夜の好きな特撮番組に出てくる敵と全く同じでした。

私は走りながら逃げました。ですが目の前

ミラーモンスター「じゃあああああああ！」

巨大な蜘蛛の怪人が現れました。蜘蛛の怪人は口から糸を吐いて私の身体に巻き付けてきました。私はそのまま倒れてしまった。蜘蛛の怪人は私を食べようと近づいてきた。死にたくない、死にたくないです。私はまだ彼に……朔夜さんに気持ちを伝えてません。彼にしたいこと、やりたいことをしてませ。助けて……朔夜さん助けて……。すると黒い弾が蜘蛛の怪人を弾き飛ばすのを見ました。顔を飛んできた方を見ると

朔夜「だから止めただろ？後人の話は最後まで聞こうぜ？」

左手を前に突き出し、右手には黒い日本刀を構えていた朔夜さんが立っていた。

朔夜「あの後に『俺もついていくなら良いけど』って言おうとしたのにな。まあアインハルトが無事ならいいか。」

朔夜さんは蜘蛛の怪人を睨み付けて

朔夜「デイスパイダー、よくもアインハルトに……大切な人に手を出したよな……死んで償え变身！」

彼の身体は闇に包まれ、闇がはれると彼の姿は変わっていた

朔夜サイド

俺はクウガとブレイドを足した感じの姿、仮面ライダーダークネス

に変身した。俺は左手を突き出し

朔夜「ダークネスバスタアアアアアアアア！」

俺はデイベインバスターを黒くした感じの砲撃ダークネスバスターを放つ。デイスパイダーは吹き飛ばされるが仕留め損ねた。俺はジャンプをして、足に闇の力を溜めて、

朔夜「ダークネスブレイク！」

俺は闇の力を込めたライダーキック、ダークネスブレイクを放った。デイスパイダーはそのまま爆散した。

朔夜「さてと行くぞアインハルト、母親を探しに」

俺はアインハルトを縛っていた糸をほどき、歩き出した。

アインハルト「その姿は何ですか？」

朔夜「仮面ライダーダークネス。あの時に質問した。答えを言うよ。俺はこの力で色んな平行世界を旅して、救いに行っていたんだよ。」

アインハルト「何故そんなことを？」

朔夜「闇の神だからだよ。さて、質問は後だ。敵が来た。」

俺の目の前にダークローチが大量に現れた。俺は自分の周りに闇の弾丸を創り

朔夜「ダークネスシューター！」

50の闇の弾丸がダークローチを貫く。俺は漆黒の日本刀、刹那を出して、

朔夜「タイムブースト」

俺はクロックアップ並のスピードを出す技タイムブーストを発動して、刹那に闇の力を込めて

朔夜「ダークスラッシュ！」

俺は闇の力を刹那に込めてダークローチを斬り捨てた。するとダークローチは次々に爆発していった。俺は刹那をしまい。アインハルトの近くに行き彼女を抱き抱えて、アインハルトの家に向かう。

アインハルト「お母さん！お母さん！」

アインハルトは自分の家に入り、母親を呼ぶが返事が無かった。まさかね……俺は変身を解いて入り、アインハルトとある部屋に入ると

？「く〜う、く〜う」

アインハルトの母親グレイス・ストラトスは普通に寝ていた。ある意味凄いやな……俺はため息を吐き、

アインハルト「お母さん起きてください。」

アインハルトはグレイスさんを譲り起こしていた。

グレイス「あらゝアインハルトちゃんに朔夜くん」

アインハルト「起きてくださいお母さん」

朔夜「とりあえず家に来てください。」

すると俺たちは突然銀色のオーロラに包まれた。

noname（名も無き世界）（後書き）

キャラ設定

十六夜朔夜

外見

・hackのハセヲの髪をセミロングにした感じ

闇の神の少年基本は誰にでもやさしいが、大切な人が傷つけられると凄くキレル。そして鈍感でフラグマスター兼ツツコミ。戦闘スタイルはオールラウンド

仮面ライダーダークネス

朔夜の変身するライダー。外見はクウガとブレイドを足した感じの姿スペックはディケイド激情態と同等より少し低い。

武器

刹那

闇の力で生み出した日本刀。形は黒いガーベラストレイト

技

ダークシューター

闇の弾丸を空中に展開して相手に放つ技ホーミング性能あり

ダークネスバスター

一言で言えば黒いディバインバスター

シューティングバスター

まんま某電脳世界の闇の破壊者の技

ダークネスオーバーロード

此も上と同じく

タイムブースト

まんまクロックアップ

ハイパータイムブースト

まんまハイパークロックアップ

ダークネスブレイク

ライダーキックに闇の力を込めたもの

ダークネスインパクト

ライダーパンチに闇の力を込めたもの

ダークシールド

前方に闇の壁を創る技

此は変身前でも使えるが威力などが落ちる

アインハルト・ストラトス

外見はまんまアインハルト・ストラトス

平行世界のアインハルトで朔夜の幼なじみであり、この作品のメイ
ンヒロインの一人。礼儀正しい子朔夜に恋心を抱いているが中々言
い出せずに居る。料理や家事はそこそこ出来る。魔力は無い

黒葉烏

外見スパロボのアクセル・アルマー

この作品では使い魔ではなく重力の神。頭がアレで色々やらかすが、
何でもこなせるチートオブバグである。

戦う生徒会 生徒会の一存×ギャバン (前書き)

始めます

戦う生徒会 生徒会の一存×ギャバン

朔夜「此処は？まさかね」

俺は周りを見ると次元の狭間に居た。まさかね…………

？「よゝ朔夜、挨拶は抜きだ。今一部次元がヤバイ状態だ。説明だけする」

朔夜「分かった最高神」

俺の目の前に銀髪のテンパ……………最高神が現れた。外見は銀魂の銀さんだ。

最高神「今一部の次元世界は真ショッカーと邪神によって崩壊の危機に陥ってる。だから朔夜、お前にはそれを阻止してもらう。無論こっちも崩壊しないように処置はしておく。」

朔夜「了解だ。」

するといつの間にか俺の拠点の中華料理屋だった。

烏「朔夜おかえりー、話は知ってるぜ。後此はテンパがお前についてよ」

烏の手にはアブゾーバにタッチパネルをつけたようなアイテムがあった。

朔夜「何だこれ？」

烏「リミットドライバー。後はこの説明書読んで覚えてくれや。俺が造った訳じゃないし」

アインハルト「あの朔夜さん、烏さん説明をお願いします。何が何だかわからないので」

朔夜「分かった。俺たちはな……………」

俺たちアインハルトとグレイスさんに説明をした。二人は理解をしたようだった

グレイス「朔夜そうだっただね」

アインハルト「そんな危険な事をしていたのですか。」

朔夜「まあね。さてと行こうか烏。」

烏「了解（ ）」

烏はロールを回した。おいアインハルトが居るのに！

朔夜「何やってるんだよ！アインハルトたちがまだ居るのに！」

烏「でもよう、あの世界に居ても危険だぜ？」

朔夜「だけど！」

烏「俺たちと居た方が安全だろ？」

朔夜「わかったよ……後この世界は確か生徒会の一存だよな？口
ールを見るかぎりは」

烏「だな？早速情報集めようぜ」

朔夜「ああ、」

俺たち外に出て行くとアインハルトは俺たちについてきた。

アインハルト「私にも手伝わせてください！邪魔はしません。」

アインハルトは真剣な目で俺を見た。この状態だと退かないよな

朔夜「わかったよ。付いてきなよ。」

俺たちは外に出ると俺とアインハルトの服装が碧遥学園の制服にな
っていた。

アインハルト「服装が変わりましたね」

朔夜「ああ、この世界の使命らしい。」

アインハルト「そうなのですか？」

朔夜「ああ。さてアインハルト、碧遥学園を探しに行くぜ」

アインハルト「碧遥学園？」

アインハルトは首を傾げながらそう言ってきた。

朔夜「この世界の舞台さ？」

俺はアインハルトの手を握りしめて走り出す。アインハルトは顔を若干赤くしていた。俺は気にせず空いている手でスタッフフォンを取り出して碧遥学園を探していた

アインハルト（朔夜さんと手を繋いでいます。何度も繋いでいます。がやはりドキドキが止まりませんよ。朔夜さんに心臓の音聞こえてませよね）

朔夜「すぐ近くじゃなか！」

俺は碧遥学園の位置を探していたら、すぐ近くにあった。俺たちは碧遥学園を見つけて敷地内に入るとある先生が俺たちに話しかけてきた。

？「お前たちが転入生か？」

アインハルト「えっ！ち……朔夜「はい！」」

アインハルトは違うって言いそうになったから俺が割り込んで訂正した。俺は小声で

朔夜「話を合わせてくれよアインハルト」

アインハルト「何故ですか？」

朔夜「もし転入生じゃないってバレたらこの世界の最重要人物に会いにくくなるからさ」

アインハルト「そうですか。わかりました」

すると先生がこちらを振り向く。すると口を開き、

先生「何を悩んで居るんだ？元帰宅部員？」

やはりかよ……………やっぱり気づいていたのかよ紗鳥……………

朔夜「やはり気づいていたのかよ紗鳥」

アインハルト「朔夜さん？その人と知り合いなのですか？」

朔夜「ああ、真儀瑠紗鳥だ。俺の先輩だ。」

紗鳥「はじめましてだ。ストラトス。私は真儀瑠紗鳥だ。」

アインハルト「初めまして、アインハルト・ストラトスです。」

紗鳥「そうだ。巫女娘を呼ぶでしょう。巫女娘が朔夜が来たと知れば喜ぶしな」

朔夜「鈴音を呼ぶ気か？つつか紗鳥俺が居なくなって何年経つんだ？」

紗鳥「五年だ。」

朔夜「五年となると鈴音は23か……………」

紗鳥「お前はいくつになったんだ？」

朔夜「二十歳だ。」

紗鳥「そうか。さて教室についたぞ。呼んだら来てくれ。」

朔夜「了解真儀瑠先生」

紗鳥が先に入り、俺たちをよんだ。俺たちが入ると、男子も女子も甲高い声を出していた。

此処の学校のテンションは高いよな……質問攻めの日を向かえるんだろ？俺たちは……実際にそうだった。俺は杉崎に頼んで生徒会を覗かせてもらうことにした。すると

くりむ「もう止めて！千鶴！鳥！」

会長が千鶴と鳥に……鳥？

朔夜「鳥うううううう！何で居るんだよ！」

鳥「お！朔夜か、俺は此処の三年だからな。鳥先輩と呼べ。」

鳥は会長をいじりながらそう言ってきた。

朔夜「やだ！」

俺がそうはつきり言った。

鍵「即答！少しは悩めよ十六夜！」

深夏「そこはツッコミ入れるところなのか？鍵」

夫婦漫才的なものをしている杉崎夫婦。まあこいつらは付き合ってるから夫婦で良いのかな？

真冬「お疲れさまですセンパイがた。」

？「お邪魔します」

すると入り口から真冬と一文字隼人を１７まで若返らせて伊達メガネをつけた奴が入ってきた。まさかな、俺の直感が告げていた。こいつが最重要人物だとな

深夏「真冬に志郎か！恋人繋ぎなんてして、またいちゃつきながらやってきたのか？」

そう言う二人は赤くしていた。

朔夜「椎名姉も人のこと言えないんじゃないのか？杉崎と昼休みや此処に来るまでいちゃいちゃしてたんだし」

志郎「確かに何時もいちゃいちゃしてるもんな深夏と杉崎は」

俺が椎名姉にそう言って志郎って奴が言い返すと椎名姉と杉崎は真っ赤になった。おお！お湯沸かせるんじゃない？

紗鳥「おい、十六夜居るか？」

紗鳥がズカズカと生徒会室に入ってきた。俺に何の用なんだ？

朔夜「何ですか？真儀瑠先生？」

紗鳥「お前に客だ。ついてきてくれ」

俺に客？誰なんだ？俺は紗鳥についていく。屋上についた。そこにはワンピースを来ている一人の女性がいた。俺のよく知る女性。変わらないな、鈴音

鈴音「久しぶり朔夜」

朔夜「ああ、久しぶりだな鈴音」

紗鳥「私は下に戻ってる。積もる話をしろよ二人とも」

紗鳥はそう言っ下りの階に行ってしまった。俺はポケットに手を突っ込みながら

朔夜「今は何してるんだ？」

鈴音「家を継いでる姉さんと一緒に」

朔夜「そうか……………紗鳥から聞いたよ。まだ俺のこと諦めてないだな……………」

鈴音「うん。諦めてないわ。まだあたしは貴方の事を心から愛しているわ」

朔夜「でも俺は……………」

俺はそのまま下を向いて呟く

朔夜「……………付き合えない。俺は異界の人間で人ではないから」

鈴音「知ってるわ。でもあたし諦めない。諦められないから」

朔夜「そう……………か……………」

俺は鈴音を見ながらそう言った。鈴音は笑顔で「そうよ」って言った。その顔はあの頃みたいに可愛かった。するとグラウンドから爆発音が聞こえた。俺はそれを見ると杉崎たちが襲われていた。俺はそれを見て屋上から飛び降りた。

朔夜「みんな下がれ」

くりむ「十六夜……………」

朔夜「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

俺は仮面ライダーダークネスに変身した。俺は刹那を抜き、目の前の怪人に刹那を向ける。俺はそのまま走り出して斬り裂いた。怪人は腕で防御した。硬いな、なら！俺は刹那に闇の力を込めた。するとするりと怪人の腕が斬れた。さらに俺は斜め下から刹那を振り怪人を袈裟斬りする。すると怪人は爆散した。俺は後を見ると

志郎「出たな破壊神お前にこの世界を破壊させない！蒸着！」

志郎はギヤバンに変身した。何でこの世界にギヤバン！ギヤバンはレーザーソードで俺を斬ろうとして構えていた

戦う生徒会 生徒会の一存×ギャバン (後書き)

次回の闇の神IFは！

志郎「この世界をはさせない！いなくなれ！破壊神」

烏「切り刻んでやろうか？」

朔夜「お前、死んだことあるだろ？」

鍵「俺は……………」

朔夜「お前に戦う罪を背負う覚悟はあるか？」

鍵「それでも俺は！」

朔夜・鍵「変身！」

絆の力で限界を越えろ！

覚悟する生徒会（前書き）

寝落ちした！

覚悟する生徒会

志郎「この世界は破壊させない！俺が守る！」

ギャバン、志郎は俺にレーザーソードを振り下ろしてきた。俺は刹那で受け流して殴り飛ばした。

朔夜「タイムブースト」

俺は通常の千倍のスピードで移動し回し蹴りを放つ志郎は横に吹き飛ばされる。俺は刹那を構えて斬りつける。

朔夜「何で俺が破壊神なんだよ！」

志郎「ある人が言っていた。破壊神・ダークネスがこの世界にやって来て破壊するって！」

絶対に真人か鳴滝だよな……俺はそう思いながら刹那を下に向けて志郎に近づくと志郎はビデオガンを撃ってきた。俺はそれをもろに喰う。すると

烏「テメエエエエエエ！よくも朔夜に手をあげたな！」

校舎から出てきた烏はそう言いながら四角いベルトを出して腰にまく。そしてベルトについているレバーを引きながら

烏「変身！」

烏は遊戯王の孤高のシルバーウィンドをライダー化し金色のガンド

レットを付けたライダー、仮面ライダーグレビティー

烏「死にさせやああああああああああ」

志郎にローリングソバットを喰らわせて、腰に付けていた血のような真つ赤な両刃剣ブラッティーターを取り出して

烏「切り刻んでやろうか？」

志郎の首に突き付けていた。俺は今にも志郎を斬りそうな烏を羽交い締めにした。

朔夜「止める！こいつを殺す気か！」

烏「H A N A S E！」

朔夜「離すか！離したらお前殺すだろギャバン！」

烏「当たり前だ！朔夜を殺そうとした罪は海より深く谷より深いのだから」

朔夜「何で海！そこは山より大きくじゃないの！」

烏「そんなことはどうでもいい！離せ！」

朔夜「もう寝てろ！」

烏「ぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽおお！」

俺は烏の首を思いつきり叩き烏は気絶した。すると校舎から出てき

た。アインハルト、鈴音、紗鳥は生徒会メンバーの前に立つ

アインハルト「朔夜さんが破壊神ってどういうことですか！」

鈴音「そうよ！朔夜が破壊神ってどういうことよ！」

紗鳥「確かに十六夜が破壊神はきになる。亀田、話してくれないか？」

志郎「実は俺が知らない怪人と戦ってる時に古風の探偵服を着ている男に『ギャバン本当に戦う相手はそいつらではない、破壊神ダークネスだ』っと」

朔夜「鳴滝か………ディケイドのほかに俺も狙って来るようになったか。真人野郎！ム力つくぜ」

俺は胸くそ悪くなりその場所から走り出して適当な場所に向かった

烏サイド

朔夜がどっかに行ってしまった後俺はこいつらに俺たちのことについて説明した。俺たちが異世界から来たこと、一部の平行世界が崩壊しかけること、そして俺たちの世界が崩壊寸前のことを。それをみんなはただ黙って聞いていた。

志郎「すまない………俺のせいで………」

烏「まったく………」

アインハルト「貴方が言えるセリフですか！貴方も志郎さんを襲っ

たのですから言えません」

アインハルトが俺を思いっきり殴ってきた。

烏「だって、朔夜が襲われてたから……………」

アインハルト「だってじゃありません！」

烏「わかったよ……………とりあえず朔夜を探しに行くか」

俺とアインハルトに朔夜の知り合い二名は朔夜を探しに走り出した。
まあ直ぐに見つかるだろう

朔夜サイド

俺は適当に歩いてた。そう破壊神って言葉に反応してしまったのだ。過去の嫌な記憶が蘇ってしまった。そう邪神と呼ばれていた頃の記憶が……………

朔夜「破壊神か……………」

俺はフラフラと歩きながら裏路地に入る。すると何かとぶつかってしまった。

朔夜「いてっ！」

すると目の前に息を切らして尻餅ついたアインハルトが居た。

朔夜「アインハルトか……………どうかしたのか？」

アインハルト「どうかしたのかじゃないです！どうして勝手に居なくなっただのですか！」

朔夜「悪い……………破壊神って言われてな、昔の事を思い出しちゃったんだ『邪神』って呼ばれていた時の事をな……………」

アインハルト「邪神ですか？」

朔夜「ああ、邪神だ。ほら、高一の時のあの時期だ。」

俺はアインハルトに説明した。邪神の時の俺の話を

朔夜「あの頃はさ、力に酔いしれてて、人殺しが楽しかったんだよ。自分が優位立って人の命を好きに出来る。そんな非道な奴だったんだよ。」

アインハルト「……………そうだったんですか。あの時の朔夜さんは困ってた私や色んな人を助けてくれたじゃないですか。」

朔夜「気まぐれさ。まあ話は終わりだよ。さてその二人、盗み聞きは無いんじゃないか？」

鍵「バレてたのか」

深夏「流石に無理だったか」

鍵と深夏が現れた。そっぴやあ、鍵からは何か人とかと違う力を感じる。まるで……………みたいだ。……………試しに聞いてみるか

朔夜「杉崎」

鍵「何だ十六夜？」

朔夜「お前……………」
度死んでるだろ」

俺がそう言ったら、杉崎は一瞬表情が強ばった。しかし直ぐに元に戻る

深夏「十六夜も冗談がキツいぜ。鍵が死んでるはずがないだろ？」

朔夜「嫌、死んでる。そしてオルフェノクとして蘇った。違うか？
お前灰色の超人オルフェノクだろ？」

鍵「……………ああ。」

朔夜「まあ別に良いんだけど」

深夏「鍵……………」

鍵「深夏俺は……………」

深夏「かつこいいじゃんか鍵！」

鍵「えっ！」

鍵は深夏の言葉に耳を疑っていた。

深夏「死んで蘇って、力を手に入れる・何処の主人公だよ。かつこ
いいじゃんか！流石あたしの認めた男だぜ！」

鍵「深夏………ありがとう」

杉崎は椎名に微笑んだ。椎名は顔を赤くしながら

深夏「いいって／＼」

朔夜「さてと杉崎、悪いがどうしてお前は死んだんだ？」

鍵「実は………」

杉崎は中学の二股疑惑のイジメがエスカレートしてボツボツコにされて最後は金属バットが頭に当たり死んだらしい。何だよそれ！

朔夜「悪い………」

鍵「気にするなよ。お互い様だ。」

深夏「あの二股疑惑にこんなことがあったなんて………」

アインハルト「酷いです。あんまりじゃないですか………」

すると銀色のオーロラが俺たちを包み込むすると回りはコロシウムに変わり目の前にはカイザとナイトが居た。

朔夜「お前らは下がってろ。」

鍵「俺も戦う。」

杉崎は俺の隣に立っていた。

朔夜「杉崎、お前戦うってことはどういふことかわかってるのか！」

鍵「……………わかってる」

朔夜「戦う罪を背負う覚悟はあるだな。」

鍵「……………ああ。」

俺はSMART BRAINのロゴが入ったアタッシユケースを杉崎に渡す。

鍵「此は？」

朔夜「ファイズギアだ。使って覚える。」

鍵「わかった。」

杉崎はファイズショット、ファイズポインターをファイズギアに取り付けてファイズフォンにコードを入れる。俺もダークネスドライバーを出して

STANDING BY

朔夜・鍵「変身！」

COMPLETE

杉崎は戦う罪を背負い、夢を守る戦士仮面ライダーファイズに変身し、俺はダークネスに変身した。俺は刹那を出してナイトに構えた。杉崎はファイティングポーズとる。カイザはカイザブレイガンを取

り出して斬りかかる。杉崎はファイズショットにミッションメモリーを入れて殴る。

鍵「こう使うのか……………こっちも試すか」

杉崎はミッションメモリーをファイズフォンに差し込み、ファイズフォンを銃の形にして撃つ。なかなかやるな。俺はナイトの攻撃を避けながら見ていた

ナイト「よそ見とは余裕だな。」

朔夜「周りを見てないのはお前だぜ」

そう、ナイトの周りには無数の漆黒の弾丸が展開していた。

朔夜「ダークシューター」

無数弾丸がナイトを撃ち抜く更に俺は追撃を放つ。

朔夜「弱いよ」

回し蹴りをナイトに放つとナイトは壁に吹き飛ばされていた。俺は拳に闇の力を溜めて走りだし

朔夜「ダークネスインパクト！」

ナイトの胸にダークネスインパクトを放つ。するとナイトの胸を貫き血が溢れ出した。俺は腕を抜くとナイトはずるりと倒れた

鍵「喰らえ！」

EXCEED CHARGE

鍵「はあああああああああ！」

杉崎のクリムゾンスマッシュがカイザの身体を貫く

覚悟する生徒会（後書き）

次回は闇の神は

「ははははは！真ショッカーの力は良いぜ！」

「……………ブレスが！」

「くだらなくなんかない！寧ろ誇らしいことだ！大切なものだからこそ！脆く弱いんだ！だから守らなきゃいけないんだ！」

リミットフォーム・ギャバン

絆の力で限界を越えろ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7459x/>

闇の神IF

2011年11月4日07時24分発行